

「21世紀COEプログラム」（平成15年度採択）中間評価結果

機 関 名	国際基督教大学	拠点番号	J 2 0
申請分野	学際・複合・新領域		
拠点プログラム名称 （英訳名）	「平和・安全・共生」研究教育の形成と展開 Research and Education for “Peace, Security, and Conviviality”		
研究分野及びキーワード	＜研究分野：広域平和研究、国際関係論＞（平和）（安全）（共生）（和解）（ネットワーク）		
専攻等名	行政学研究科（行政学専攻）、教育学研究科（教育原理専攻・教育方法学専攻）、 比較文化研究科（比較文化専攻）、理学研究科（基礎理学専攻）		
事業推進担当者	〔拠点リーダー名〕 村上 陽一郎 教授 他 15名		

◇拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書（平成17年4月現在）を抜粋

＜本拠点がカバーする学問分野について＞ 本学問分野は「広域平和研究」であり、純粋な意味での平和研究に加えて、国際関係論、政治学、社会学、安全学、教育学、物理学など諸学問領域にまたがる専門家集団が、学際複合的視点から「平和・安全・共生」について研究調査し、多様な課題と取り組んでいる。今日、平和研究は、複雑化する世界と社会の状況を反映して、学問的構造転換の渦中にあり、「広域化」「分節化」「統合化」を余儀なくされている。
＜本拠点の目的＞ 本プログラムの総合的目的は「広域平和研究」の分野で世界および東アジアにおける最高水準の拠点形成を行うことにある。これまで本学が構築してきた国内および世界各地の大学や研究機関とのネットワークを駆使して、多方面にわたる平和研究教育を推進する世界拠点（ハブ）の形成と展開を目指している。「戦争と不安の時代」という新たな様相を呈してきた今日の世界の現状において、本拠点から世界平和のメッセージを国内外に発信していくと同時に、紛争予防・紛争解決・平和構築・問題解決の課題に理論的および実践的に寄与し、また具体的に寄与し得る若い人材を数多く育成していきたい。 拠点リーダーを中心に「広域平和研究」のグランドセオリーを構築し世界に向けて発信していくことも本拠点の目的の一つである。その関連では国内はもとより、東アジア、南アジア、北米、欧州を繋ぐ国際的な学術交流のネットワークを確立し、そこから共同研究の成果として数多くの研究書や出版物の刊行を目指している。
＜計画：当初目的に対する進捗状況等＞ 本プログラムは申請時に三大プロジェクトを機軸として提案されたが、採択時の「留意事項」を受け、第一年度の試行を経て、内部で審議し、的をしばった形でのより緊密な統合的プログラムを目指して、それぞれ平和、安全、共生を軸とする三つのプロジェクトに再編されて今日に至っている。この再編により緊密な連携が組織的にも理論的にも可能となった。最初の二年間は、プロジェクト毎の現場での個々の研究に重きがおかれ、本プログラム全体の外縁拡充がなされた。第三年度以降は、統合的なプログラムとしての収斂の作業が中心的課題となる。第三年度以降は、グランドセオリーの構築を目指すと共に、二つの共同研究会の立ち上げ、COEウェブサイト・MLやニューズレターの活用などを通じて、より緊密な統合化を果たしていきたい。本プログラムは、各事業推進担当者の精力的な研究教育努力により、三つのプロジェクト共に力強く堅実に推進され、多大な成果を上げつつある。
＜本拠点の特色＞ 本プログラムは再編された三つのプロジェクトから成立している。(1)「平和・人権・ガヴァナンス」、(2)「安全・環境・サステイナビリティ」、(3)「共生・教育・ジェンダー」である。これら三つのプロジェクトを機軸に展開されているが、以下の五つの特色がある。① 安全学、人権論、環境保護、ジェンダー研究、平和教育、共生教育、心と身体のカラ等を含む「広域平和研究」、② 本学の国際性を基礎にした世界ネットワーク型の拠点形成、③ 小規模な大学の持ち味を生かした院生・学生との協働の上に立ったリベラルアーツ型の拠点形成、④ 「平和・安全・共生」グランドセオリーの探究、⑤ 学識と具体的技術とを兼ね備えた高度職業専門人、紛争解決型ないし問題解決型の実務家といった若手の人材養成を主眼に置いた実践的な拠点形成。
＜本拠点のCOEとしての重要性・発展性＞ 本プログラムはわが国のCOEとして以下の二つの特質を兼ね備えており、それが本学の世界拠点としての重要性と発展性を基礎づけている。 (1)「比較政策的な調査・分析・考察」 本プログラムの事業推進者、研究協力者の多くは、専門分野は各自異なるが、基本的に日本と諸外国との国際比較を方法として採用しており、すでに世界各地の多数の研究者・実務家・政府関係者・各種国際機構の関係者とのネットワークを構築している。これは比較政策的研究を進める上で貴重である。 (2)「世界各地の拠点との交流と制度的連携の強化」 世界各地に散在する「広域平和研究」の拠点との既存の研究教育上の連携をさらに制度的に発展強化させていく条件がすでに整備されている。
＜本プログラム終了後に期待される研究・教育の成果＞ 以下の三点において多大な成果が期待できる。 (1)「若手研究者の育成および問題解決型の人材養成」 中長期的展望に立って、学術的研究者に加えて、理論的知見と専門的技能を兼ね備えた高度専門職業人、問題解決型、紛争解決型の専門家や実務家を日本社会と世界に送り出す計画である。これは多くの国際諸機構に多数の卒業生を送り出してきた本学の伝統の継承でもある。 (2)「東アジアのハブとしての拠点確立、および世界ネットワークの具現化」 (3)「幾多の優れた研究書および出版物の刊行」 本プログラムによる活発な研究教育は、研究者および院生の研究を促進し活発化し、多くの重要な研究書および出版物の刊行に結実することが期待される。
＜本拠点における学術的・社会的意義等＞ 大きく以下の二点において確認できると考えている。 (1)「平和研究の構造転換」従来の狭義の平和研究ではなく、平和研究の広域化と学際化を通じて、複雑化の一途をたどる今日の平和・紛争問題に対して、内在的・現実的なアプローチを提示している。「広域平和研究」グランドセオリーは、平和研究の新しい方法論、平和への構造的理解、ミクロ・マクロの接近視角を提示する。 (2)「広域平和研究の世界ネットワークの形成と展開」 本プログラムの意義と波及効果は、一つには、学問的・言語的・文化的な諸要因によって誘発される各種の閉鎖性、狭小化、排他性（わが国の知と社会の構造的弱点）の克服にある。国内外のネットワークの展開により、そうした閉塞状況からの脱皮が試みられる。

◇21世紀COEプログラム委員会における評価

（総括評価） 当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される。
（コメント） 平和・安全・共生という1つ1つ難しい研究対象をさらに統合することにチャレンジしているCOEプログラムであることは十分理解できる。 もともと、貴大学は国際性のある優秀な研究者と学生が揃っているが、現在までのところ、このCOEプログラムではこれらが個々に活動しているように見受けられる。本プログラムでは、グランドセオリーを構築中とのことなので、なるべく早期に理論仮説を構築し、個々の研究の有機的連携を図ることが、強く望まれる。さらに、これに基づいた教育プログラムを整備し、若手研究者の育成を図ると同時に、紛争予防、紛争解決、平和構築の現場で貢献できる若手実務者の育成を図ることが強く望まれる。